

「私にあるもの」

～その素晴らしさを知っていますか？～

使徒3：2～19

最近の子どもたちは、何を聞いても即答で「知らない」と答えることが多いです。それは子どもたちだけではありません。私たちが教会に行っている理由は何ですか？なぜ仕事に行くのですか？なぜ眠り、なぜ食事をして、なぜ生活を送るのか、答えられますか？空気でも水でも、天地万物全てのものが緻密な計算のもと、目的と使命を持って働いています。しかし人間だけが、「本当は…」と、分かっていながら出来なかつたり、この緻密な計算を平気で破ってしまうのです。ですから私たちはもう一度、自分がどういう目的でそこに遣わされているのかを確認したいと思えます。

蠟燭にも目的があります。自分の体を燃やしてけずって犠牲にして、私たちに光を与えるのです。このように、何か目的を果たそうとする時、犠牲が伴います。だから、私たちが目的を尋ねられると「考える」と言う犠牲を払わなければいけないので、非常に疲れます。小さい時から詰め込み式の教育で考えることが少ない環境で育ちました。だから、自分たちが「良いこと」「悪いこと」と判断していることの理由も考えなくなりました。そして「これがルールでしょ」と何事も「ルール」で判断するようになってしまったのです。例えば、やくざさんたちは、自分の身を守るためにいろいろなことを考えて行動しています。自分たちの身を守るあまり他人を傷つけてしまうことがあります。でも、それは、自分の身を守るために分かってやっているのです。私たちはどうでしょう？ルールで生きているのでルールを犯すようなこと、法に触れるようなことはしません。しかし、よく考えずに行動するので、チクチクと小さな傷を相手に負わせています。しかし、考え無しに行動していることで、相手を傷つけていることすら分からずに行動し続けているのです。そのことに気づいているのでしょうか？

今回の聖書箇所は、足なえの人の癒しの箇所です。ここではよく奇蹟がクローズアップさせるのですが、今日は、パウロの言った「金銀は私にはない。しかし、私にあるものを上げよう。」に注目したいと思います。私たちは、いつも目先に捕らわれがちです。先週も「近視眼になるな」と語られました。私たちがさまざまな物事を見る時に、その目の前にある問題から何を感じるか…です。この箇所でもパウロは金銀は私にはない。しかし、私にあるものを上げよう。」と言って、足なえの人に一時の幸せのための行動ではなく、その人の人生を変える働きをしたのです。そうすると、周囲の人々は、その起こった奇蹟に目を向けて「パウロは特別な人だ」と言うのです。現在でも多くの宗教はこの奇蹟に目を向けさせて信じさせようとするのです。神さまを信じて行ったことに対して奇蹟は起こりますが、それ自体は何ら凄いことではありません。神さまの目から見ると、その奇蹟を通してその人の人生が変わることが大事なのです。パウロの言った「私にあるもの」…私たちにあるものは何でしょう？人と比較して、「自分はダメ」「あの子はどうして…」などと現状に目が向いていると私たちにあるものを見失ってしまうのです。

自分にあるもの、その素晴らしさを知っていますか？産まれた時から、私たち1人1人になににしかない個性があります。これを聖書では「タラント」と言います。芸能界で才能のある人のことをタラントと言います。この元はこの「タラント=磨いて作りあげた才能ではなく、無条件に与えられる才能」です。この個性が、その人の目的になります。この目的を果たして生きる時に「タラント」と呼ばれるような輝いた姿になるのです。ところが、私たちは自分の個性を感じなくなりました。みんな同じように育てられて、将来もみんな同じようなものなることを望まれて、さらに「どうして○○ちゃんは出来るのに、あなたは出来ないの？」などと比較されてしまって、「出る釘は打たれる」状態で、目立つ個性を奪われてきたのです。個性を奪われた子は、二度とその個性を出そうとはしません。となりの人を見てください。同じですか？違いますよね。みんなそれぞれ個性的なのです。この様な世の中で、このクリスマスに教会に集まっている私たちは、私にあるものに目を向けていかなければいけません。私たちが持っているものを、ただ知るだけです。イエスさまは、真つ暗な洞窟の中でお生まれになり、世を照らす光となりました。今、私たちの心の真つ暗で自分が分からなくなっているところにイエスさまの光が照らされています。その光によって自分の良いところも悪いところも見えるようになります。神さまが与えてくれたタラントは私たちが生かす道具でもあり殺す道具でもあるのです。それはどう用いるかによるのです。だから自分にあるものが何なのかを理解していなければ私たちは、その用い方を誤ってしまうのです。

ですから、自分を知るために①無知からの脱出をしなければいけません。知らないがゆえに、多くのことを損しています。一番の損は自分の素晴らしさを知らないことです。神さまが私たちに

素晴らしく創造したにもかかわらず、そのことを忘れてしまっているのです。ですから、私たちは、自分の素晴らしさを知ることを出し惜みなくしてはいけません。自分の素晴らしさを知った私たちは、いろいろな物事に対して、知らないままで終わらせないようにするにはいけません。私たちは、考えるように神さまに造られました。「人は考える葦である」と言われるとおりです。葦は群生しますが、それぞれが立っていなければみんな倒れます。ですから教会に集う私たちが、教会で力を蓄えて、それぞれ考えて行動し、それぞれがおかれているところでそのタラントを發揮すればその場は変わります。聖書に御言葉から、神さまから知恵をもらって考えて行動しましょう。そうすれば私たちが変わります。口から発する言葉や顔の表情一つをとってもです。それが相手にどう影響するかで、相手が変わるかどうかが決まってくるのです。クリスマスにどうしてツリーやポインセチアを飾るのか、正月に餅を食べるのか知っていますか？「慣習やしきたりだから」で終わらせては意味がありません。私たちが無知であることを今日捨てましょう。

そして②今から明日へ！向かって生きていきましょう。私たちは今に目がいきがちです。パウロは、足なえの人を癒した時、彼の足が可哀相で、癒したわけではありません。彼の今ではなく明日、将来の人生を見ていたのです。私たちはいつもどこに目が向いているのでしょうか？無知であることと明日を見ないで今を見ることは同じです。私たちが考える・無知から脱出するためには明日を見なくてはいけません。私たちの明日が何のためにあって、だからそれをどう生きるかを考えるのです。宮沢賢治の作品で「雨にも負けず」があります。この作品のモデルになったのは斎藤宗次郎という人です。この人は神さまを知る前は愛国主義者で国家主義的な思想の持ち主でした。そして教師になってそこで内村鑑三と出会い、彼から感銘を受けて23歳で受洗します。ところが洗礼を受けた時から、実家の寺や村から迫害され、大変な人生を送ります。クリスチャンであるがゆえに教職を追われ、娘は「耶穌！」と罵られお腹を蹴られて腹膜炎になって死んでしまいます。そんな中でも彼は負けませんでした。彼の生き方が「雨にも負けず」だったのです。これだけ迫害されても、イエスさまの姿にならって、新聞配達をしながら毎朝、1軒1軒まわりながら、その家のために祈り続けていました。質素な暮らしを送り、笑顔を絶やさず、みんなを助けて動いていました。そして後、内村鑑三に呼ばれて教師になるためにその地を離れることになりました。その時、宗次郎さんは自分を送ってくれる人なんていないと思っていました。しかし、彼を見送るために駅には町長をはじめ多くの人たちが集まっていたのです。自分を迫害してきた人たちが…。この人々の中に宮沢賢治もいたのです。斎藤宗次郎さんの生き様を町の人たちは見たのです。彼は迫害されました。しかしそれが一粒の麦となって多くの人々を救いに導きました。町全体が変わったのです。彼の生き様を書いた宮沢賢治の聖書的な作品から多くの文豪たちも影響を受けたのです。斎藤宗次郎の生き方は目的を果たそうとするものでした。宮沢賢治に「わたしはなりたいたい」と思わせる人生でした。命がけて明日に向かって生きていたのです。

つまり、③命をかけて人生を生きるということなのです。私たちの人生を命をかけて生きていきましょう。なぜかという、私たちがために命をかけてくださった方がいるからです。ディヴィッド・ウィルカーソンという牧師がいました。『十字架と飛び出しナイフ』の著者であり、ニューヨーク、タイムズ・スクエア教会と厚生施設ティーン・チャレンジ・センターの創立者として知られていました。田舎の教会にいましたが、ニューヨークに行けという神の導きを聞きその通りにしたのです。そこで麻薬中毒やギャングの少年少女たちに命がけて福音を伝える働きをしていました。彼の命がけの伝道は、人生を通して多くの人を救いに導きました。私たちは、自分の人生に命をかけてどうしようか？唯生きるのでは勿体ないです。私たちに定められた時があります。その時をどう生きるかは私たち次第です。

ある人が約2000年前に、真つ暗な薄汚れた家畜小屋で産まれました。そしてその人は無知な人々によって十字架にかけられました。彼は、私たちの人生を変えるために、わざわざこの様な場所で産まれたのです。私たちの真つ暗な心に光を射すためにです。彼のことを知った多くの人が人生で目的を見出し、生き方を変えました。私たちがどうしますか？私たちのところまで、命がけてこのキリストの教えが、本当の愛が継承されていたのです。今日、自分の素晴らしさ、目的を知り、自分の光と神さまの光と一緒に、他の多くの人たちを照らしていきましょう。